タンスの中のわたし

西村郁子

ベッドの上に起き上がり、病室の戸口をじっと見ていた。その視界に看護師が飛び込んできた。

「植村さん、どうですか？」すたすたと早足のままベッドの横まできて、訊いた。それから、わたしの左手を取って点滴の針を止めているテープを外す。わたしの返事など最初から聞く気はない、いつものことだった。

何気なく腕に視線を落とすと青紫に変色した皮膚の周辺が黄色になっていた。血管が細くどんな熟練の看護師の人がやっても必ず内出血をした。今看護師が掴んでいるわたしの手首も彼女の指が余るほど細い。今年、三〇歳だが身長一四五センチで体重は三十八キロしかなく、後ろからみたら小学生と間違われることもしばしばだ。

今回の入院で一時、四十キロまで増えたが、点滴から病院食に切り替わるとすぐに元の体重に戻った。看護師は額に貼っているテープを取り換え終えると、来た時と同じ速度で病室を出て行こうとしていた。

「あの、いつごろ退院できますか？」

看護師の背中に向け、大声で訊いた。

看護師はぴたっと動きを止め、腕時計をみた。

「主治医の先生が今度病院に来られるのが木曜だから、その時先生に訊いてみて。たぶん、その日に退院してもいいと言われるんじゃないかな」

そう言うとまた時計を見て病室を出て行った。

入院して一カ月になる。

額に小さな突起が出来たと思ったらあっという間に大きくなった。形も歪で黒い色素が広がってきた。ネットで調べて同じような症例をみると楽観はできなさそうだった。すぐに病院へ行った。診断は初期の皮膚がんだった。

枕元に置いてあるメイク用の大ぶりの鏡を取り、顔を映した。右眉を覆い隠すように生えぎわから額の半分にテープが貼られている。前髪が伸び、真ん中より右よりのところで線を引いたように分け目ができている。入浴は二日に一度のため、髪の毛はいつも油でべたついていた。少し鏡を離して胸元あたりからの姿をみた。肩幅が狭くいかり肩、首は細くストレートネック気味だ。頭は額が広く横に張っていて見るからにアンバランスだし、目は二重で大きいが黒目が小さいため、いつも何かに驚いているときのような表情になる。やや受け口で上下の歯並びがぶつかるように前に飛び出し、口をしっかり閉じようとすると鼻の下が伸びた間抜け顔になってしまう。手術直後の目元が腫れて目が開かなかったときのシニカ

ルな顔が懐かしいなと思いながら鏡を置いた。
四人部屋の窓際のベッドは日当たりがいい。同室の患者たちの退院が相次ぎ、いまは自分しかいないことも気分を良くしている理由だと思う。ひと月の間に何回も入れ替わりがあった。入院患者は変わっても見舞い客は似通っていた。どの患者も高齢の女性だったので、毎日、同じ時間に中年の女性がやってきた。聞くつもりもなくとも、彼女らの会話を耳にしていると、母娘だと分かる。言葉はつっけんどんに聞こえても娘は母親の体を労わっているし、母親は娘が帰ったあと機嫌よさそうにしていた。世の中の家族というのはやっぱりこんな風にしているものなのだと、自分の育った家庭と比べて思うのだった。
わたしは母親の顔を思い浮かべるとき赤いレーヨン地のブラウスを着ている姿しか出てこない。暗い部屋で寝ているわたしを起こしに来た時に母が着ていた服だった。逆光で母の顔は見えない。ただ外からの灯りで浮かび上がった赤いブラウスがあまりにも印象的だったのだろう。入院しているわたしのところには家族の面会はなかった。

菜種梅雨と言われる雨続きの三月末だったが退院の日は晴れて暖かだった。
朝ごはんのトレイが回収されたと同時に病室に主治医がやってきた。額に貼ってある大きなテープを剥ぎ取って、患部の状態を凝視している。指が額の上をなぞっている。馬蹄形に切り取られた腫瘍のあとを触診しているのだと想像した。それから首のリンパを確認するため顎に手を添えて頭を動かした。顔が窓の方をむくと、見慣れた景色があった。そこはメタセコイアの木に囲まれた公園の一部で公園内にランニングコースがあり、朝夕は多くの人が走っていた。入院中、体調がいい時はベッドを起こして本を読んだり、タブレットで調べものをして過ごした。そして疲れると窓の外をぼうっと眺めていた。そうしているとランニングコースを走る人の中に自分がいることに気が付く。足が地面から数センチしかあがらす、手はぶらりと幽霊のように前に出して虚しく空をかいている。しまいには全く前に進まなくなるのだ。もちろん夢だった。知らぬ間に眠っている。そんなことが何度もあった。
医師が病室を出て行くと、看護師が退院に必要な書類を持ってきた。これでいつでも退院していいと言われる。入院のために病院に来た時と同じく大きめの旅行鞄ひとつで病室をでた。一階の会計に書類を出して順番を待つ。
病院を出た足で公園に行った。病室の窓から想像していた公園と実際の公園は全然違い、広さは公園というより遊園地のようだった。入口の園内図をみるとテニスコートやプールもあった。バラ園がことに有名だと写真付きの看板に書いてある。地図でベンチのあるスペースを探してみると、噴水広場と書かれた場所をみつけた。公園内の遊歩道を辿っていくと、中は隆起のある丘のようだった。
噴水広場に着くとベンチに座った。鞄から携帯電話を取り出して彼に電話をかけた。コールが八回鳴ったあと向こうがでた。
――もしもし、わたし。
――ああ。

――今退院したところ。
――そう、言ってくれたら迎えに行ったのに。
そこからわたしは手短に別れたい主旨のことを話した。彼から発せられる言葉をしばらく待ったが何も返事がなかった。もう一度わたしから、「もしもし」と呼びかけた。すると、「なんで？」と彼から返ってきた。今度はわたしが黙った。
大学でいちばん仲がよかった友だちが手術のあとに見舞いにきてくれたことがあった。わたしに彼氏ができたことを最初に報告したのも彼女だったのだが、彼は毎日来てくれるのかとわたしに訊いてきた。わたしは毎日どころか、一度も見舞ってくれてないと答えた。それを聞いたときの友人の信じられないというような顔をまざまざと思い出す。喧嘩でもしたのかと訊くので、いいやと首を振った。
学生時代も恋人ができず、やはりわたしは顔や容姿が悪いから男の子から見向きもされないのだと思った。わたしを好きになってくれる人などないと諦めていた。二十五歳のとき、勤め先は違うが勉強会で何度か顔を合わせていた彼がわたしに声をかけてきて、生まれて初めて付き合った。
やっと自分も人並みの女として生きられる。そんな期待はすぐに打ち砕かれた。彼はわたしの体はおろか、手も繋ごうとしてくれなかった。五年間、ひたすら彼がわたしを求めてくれる日を待ったというのにその日は来なかった。この貧弱な体がいけないのではと思い、Ａカップしかない胸の豊胸手術を受けた。人造のＤカップになった胸で素っ裸になって抱いてくれと頼んだ。なんでセックスしてくれないのかと問い詰めた。そのたび、彼は女の方からセックスの要求をするのはやめてくれと一蹴するだけだった。じゃあ、なんでわたしたちはつきあっているのだと訊いた。彼は息を大きく吐くのみだった。
どれくらい座っていたのか。噴水のまわりに子ども連れのグループが増えてきた。膝の上で握っていた携帯電話に耳を当ててみた。何の音も聞こえない。スマホの画面をタッチして彼からのメールが来ていないかを確かめたが来てなかった。今度は、噴水の中に立っている時計をみた。あと数分で三時になるところだった。わたしはあらかじめ調べておいたマッチングアプリを開いて、そこに自分を登録してからベンチを離れた。

半月後、マッチングアプリで繋がった男と会った。わたしが相手に要求したのは、社会人であること、自活していること、社交性があることだけだった。待ち合わせ場所に来たのは、年齢がわたしより十歳は上に見える小太りの男だった。駅前で待ち合わせて、その近くにあったチェーン店の居酒屋に入ってお互いの自己紹介から始めた。
その日にわたしはあっさりと処女を捨てた。男は小柄で痩せているわたしの体が好きだと言ってくれた。言葉のとおり、男はわたしと頻繁に会いたがり、その度に体を求めてきた。セックスは痛みしか感じなかったが求めに応じた。この痛みがずっと続くのであれば、わたしにはセックスは無理だと思った。わたしは男と会った日は必ず自慰をした。そして自慰のほうがセックスよりいいと思った。

子どものころ、わたしは家の中でもひとりで過ごすことが多かった。両親はわたしを嫌っていたので家族が集まる居間にいれなかったし、おまえは不細工で背は低くガリガリに痩せてかっこうが悪いから外に連れて歩きたくないとも言われ、家族の外出にも留守番をさせられた。特に父親は弟を跡取り息子だと母やわたしに言い聞かせ、食事も父親と同じものを母に用意させた。玩具も自転車も弟には買い与え、わたしには与えてくれなかった。

家にいるときはタンスの部屋と呼ばれている納戸に籠って遊んだ。そこには姿見付きのタンスがあって鏡に自分を映して長い時間観察をする。どんな顔をすればよく見えるか、さまざまな表情を作ってみる。わたしはきっと自分が思っている以上に見た目が悪いのだろう。そして鏡に映る横顔など、なるほど最悪だと思った。

わたしが自慰を覚えたのは小学校低学年だった。タンスの引き出しをごそごそしていたら父親が隠していたエロ本を見つけた。それを見ているとおしっこをしているのではない感覚が襲ってきた。最初は何が起こったのか分からなかった。今から思えば子どもがひとりでタンス部屋に籠っていれば、母親なりがやってきて娘の動向をちゃんとみてくれるはずだと分かる。わたしの家ではネグレクトされるかＤＶをされるかしかなかったがその時のわたしにそれが異様なことだと判断する力はなかった。わたしは両親にやられていたことをタンスの中で模倣していたのだ。その遊びが人形だった。わたしは人形に自分がされた暴力を受けさせ、自分と人形を一体化させていた。当然、自慰も人形遊びも自分だけの秘密だった。

わたしはマッチングアプリで知り合った男とセックスするたびに両親を思い出した。両親は性的なことをわたしや弟の前であまり隠さなかった。両親の寝室と子ども部屋は薄い壁一枚隔てた隣だった。父親は大抵酔っぱらっており、大声で母親をなじっては暴力を振るう。母親は寝室の中を逃げ回っている様子が伝わってくる。前に助けようと部屋に入ったら、反対に母親から思いっきり叩かれたので絶対に行かない。最後はいつも父親に捕まり、そこから両親のセックスが始まっていった。なぜ両親がこんな状態だったのか考えたことがあった。両親は若くして出会い結婚を望んだが、親から猛反対されて駆け落ちをしたのだ。精神的にも未成熟で経済的にも自立できていないまま、わたしや弟をもうけて家族になった。きっと親は大人になりきれていなかったのだ。やがてわたしが中学生になると父親の暴力がわたしに向けられることになる。母親がとうとう父の暴力に耐えきれず家出をしたからだ。酒に酔った父親は女が勉強できると生意気になるからと言って殴った。わたしは体が小さく運動も不得手だったが、勉強だけは好きだった。成績は学年でもいつもトップだった。わたしは高校卒業するまで息を潜めるように生活し、大学は家から遠いところを選んで実家から離れた。

＊＊＊

「由那（ゆな）、頼みがあるんだ」

大きな黒いボストンバッグをベッドの上に投げた。
「頼み？」
黒いボストンバッグを見下ろしながら訊いた。
時男はマッチングアプリで出会った四人目の相手だ。同じ歳の相手は初めてだった。それまでの三人はずっと歳が上だった。彼らとは数回会って、ひとりなどは一度きりで断ってきた。時男とは三ヵ月続いている。最初のデートのとき、時男とは食事だけで別れた。その時は五年付き合って一度もセックスしなかった元彼を思い出して、また元のわたしに戻るのかと恐怖した。けれど、時男はデートすると手は繋いでくれたし、別れ際にはキスをしてくれる。時男が最初にわたしをホテルに誘ってくれたときは、心底安堵した。
時男は無言で鞄を開ける。その様子を見ていると脈が速くなってくる。わたしは予想できない行動を相手がするといつも緊張してしまう。
鞄から出てきたのは猿ぐつわや手錠、鞭や縄だった。
「えっ」思わず身を引いた。
「こういうの見たことあるでしょ。俺、実はＳＭプレイをするんだ」
時男の目つきがいつもと違っている。わたしは別人になったような時男に戸惑ってしまい何も言えなかった。黙っているのが承諾したと思ったのか、時男はわたしの服の上から縄を巻き付けてくる。先端をＵ字に曲げた二本の縄に乳房を挟むように縛られた。体を弓反らされ、後ろ手にした手首と膝から曲げられた足首を結んだ。ひとつのポーズが決まると、時男はスマホで写真を撮った。
「写真撮ってどうするつもりなの」
息のしづらい姿勢で訊いた。
「ＳＭ仲間に見せる」
こともなげに言う。
「見せるってどういうこと？　仲間って？」
ここにはいない他人の顔が浮かぶ。
「由那はＭだと思う」
時男は真剣な顔つきで言うと、わたしを抱え起こし、足の縄を解くと今度は足をあぐら状に組ませて縛り直した。さっきよりも息はしやすいが、次に縛った縄を引き上げられると、そのままベッドに仰向けに転がされた。スマホのシャッターの音がするが、裏返った亀のように成す術がない。
「わたし痛いのは嫌」
ＳＭから想起されるのは父親しかいない。わたしを殴りに来るときの怒りの籠った顔や酒臭い息が思い出された。子どものころの暴力に怯えて生きてきたこと。暴力や痛さというものは、わたしにとっては何がなんでも逃げなければならないものなのだ。
時男はベッドの上に立ち上がり、片足をわたしの胸の上に置いた。
「由那はどうして縛らせてくれた？　僕を信じてくれたからでしょ」と言った。

何も言えなかった。
「じゃあ、僕を信じてＳＭのサークルにきなよ。嫌なことはしなくていい。それは約束するよ」
日をおかず、わたしは時男の紹介でＳＭ愛好グループに参加することになった。時男はわたしをＭだと言った。あの夜、正直に言うと痛みなど感じなかった。むろん、時男が慣れさせる意味でそういう行為をしなかったのもあるが、鞭やロウソクで痛みを受けることで快感が引き起こされる人がいる。わたしにはまったく理解できないからこそ知りたいと思えた。けれど、何より行く気になったのは、時男から言われた「信じている」という言葉のせいだと思う。
グループが集まる店はショーパブだった。
店のオーナーが主宰で毎回二十人くらいの男女が集まる。オフ会は店の閉店した深夜二時からで毎週金曜日に開かれた。
初めての日、時男はみんなにわたしを紹介して回ってくれた。その時思ったのは、誰が一見して普通の人だということだった。会社の親睦会で集まったメンバーと言われても違和感がなかった。
「さあ、それでは始めてもらいましょう」
主宰が縄師の男に向かって声をかけた。縄師の格好はこれまた普通過ぎるほど、普通でクリーム色のゴルフウエアのポロシャツとグレーのスラックスといういで立ちだった。頭は角刈りでひと昔前にテレビにでていた料理人のようだった。歳は四〇歳前後、背は一六〇センチあるかないかだろう。
営業中はショーをする舞台が緊縛のデモンストレーションをする場所になる。
舞台袖には今日のモデルになる女性が白いバスローブ姿で待機していた。照明が落ち、舞台にスポットライトが当てられる。一旦、バックヤードに下がった縄師がでてきた。黒いジャージの上下に着がえていた。
バスローブの女性が手招きを受けてバスローブを脱いだ。全裸だった。肌は透き通るように白く、オーディエンスに向かって正面を向くと両方の乳首に銀色のピアスが刺さっていた。彼女の陰毛は割れ目の左右一センチを残してきれいに刈り込まれ一層黒さを強調していた。
モデルをうつ伏せにすると、片膝を立てて縄をかけ始めた。そして、あっという間に梁に取り付けてある滑車で吊り上げてしまった。
会場からおおっという声が漏れた。
それから縄師と主宰が交代をするようだった。時男が耳元で主宰はＳなのだと教えてくれた。
火のついた赤い蝋燭をモデルに振りかけると、真っ白い肌が蝋の赤とそこから徐々に皮膚がピンク色に変化していくのが分かった。黒い帯状の紐がついたスティックで臀部を何

度も叩いている。モデルの体から汗が粒になって張り付いている。最後に乳首についているピアスに重りのついたテグスをつけたときは、自分の身に起きたようにひやりとした。
デモンストレーションが終わって呆然と立っていると、時男が椅子に座るように促してくれた。
「どうだった」
ウイスキーの水割りを手渡してくれ、わたしの額をお絞りで拭いてくれている。
「汗びっしょりかいて」
時男に言われて、自分が汗だらけになっていることに気づいた。
「このあとはみんながSとM、それぞれ分かれてプレイするんだけど、由那も参加するか」
時男は縄師でプレイするようだ。
「やってみる」と頷いた。
わたしは時男に縄で縛られた。まだ服を脱ぐ勇気はなかったので服の上からだ。サディスト役は時男が声をかけて若い女性がやった。
ここにやってきたときに感じた普通の人たちが数時間後にはまったく別人のように生き生きとした顔になっている。これは何なの。来るまえよりも不可解さは増したように思った。
「あなた、どうしてここに?」
わたしを鞭で叩いた若い女性が訊いた。
「彼が誘ったから」
顔を横に振って、隣にいる時男を顎で指した。
「そういうんじゃなくて。興味があったのかってこと?」
彼女は別の鞭に持ち替えて、わたしの太ももを打った。
「うっ。はい。それは、興味は、持ちましたよ。どうして痛みが快感になるか。どうして叩くと快感が得られるのかって」
すると、会話を聞いていた縄師の師匠と目が合った。
「あなたは自由ってどんなものだと思いますか?」
「えっなんだろう……。なんでも自分で選択することができるってことですか」と答えた。
「ふふふふ」
その笑いはわたしの答えが間違っているような気にさせられた。
若い女はそれに呼応するようにわたしを床のマットに押し倒した。両手を鳩尾のところで祈るような形で縛られ、首から肩におんぶ紐をかけたように縄を回されているので自分で起き上がろうとしても起き上がることができなかった。
そのとき、店のドアが開いて誰かが入ってきた。店が暗いせいかと思ったが、その人は黒い塊のようだった。
縛られたまま、目を凝らしてみると、プロレスラーが被る目鼻のところだけ穴の開いたマスクを被っているのが分かった。わたしを鞭で叩いていた若い女も同じように今入ってきた人を見ている。

「リュウ君がきたんだ」と呟くと鞭を手から離した。彼のまわりにはたちまち人の輪が出来上がっていた。彼女もそこに行ってしまった。

縛られたままでリュウ君と呼ばれる男をみていると、首から下もマスクと同様のゴム製のコスチュームを着ている。リュウ君の声や喋り方からまだ十代ではないかと思われた。体つきも背は高いが手足が細長くて薄っぺらい胴体をしていた。

縄師の師匠がリュウ君を縛り始める。表情の見えないリュウ君は人形のように見えた。その姿が子どものときにタンスの中で遊んだ人形を思い出させた。ＳＭが子どものわたしと人形とで交わした共有関係と同じならば、わたしは自分も誰かを縛ってみたいと思った。

床の上にラッコのような格好でひたすら凝視していた。横たわるわたしと目があった時、リュウ君が笑った。マスクをしているのに笑っていると確信できたのは人形遊びのときと同じだった。タンスの中の密かな遊びでは、人形たちはもちろん表情を変えたりすることはない。人形たちと深く結びついているので気持ちをわたしの心に直接伝えてくる。それと同じことがマスクのリュウ君との間で起こった。

わたしを叩いていた女は戻ってきてはくれなかった。女はわたしに興味を失ったのか、視界にわたしが入っても視線が止まることなく、別の興味の方へ移動する。わたしもリュウ君のところへ行きたい。暗い店の中を行き来する人を目で追っていると、カウンターに落ちる数本のライトの白い光の柱とそれに絡まる煙が昇っていくさまが夢見心地を誘った。それはタバコなのか、ここに来てからずっと匂っているムスクのお香の煙なのか分からなかった。床に敷かれた絨毯からは古着屋の中にいるときのような古い衣服を透過してきた空気の臭いがする。

誰の目にも留まらない自分がだんだん人形に変化していくような気になってきた。

タンスの部屋で人形遊びをしているとき、わたしは人形を無理な形に曲げたり紐で縛っていた。すると、人形がわたしにこう言うのだ。

〈ワタシは強いの。叩かれても曲げられても平気なんだよ〉

わたしが「どうして？」と訊くと、

〈だって人形だもん。ワハハハ〉

そうか、人形は強いのか……、忘れていた……。

視界が滲んで音が小さくなっていった。

誰かがわたしの名前を呼んでいる。お母さん？　タンスの中で遊んでいたはずが、いつも自分のベッドで目を覚ました。ここは家？　目を開けると、声の主は時男だった。縛られたまま寝るなんてすごいなと、笑いながらわたしを抱き起した。

無意識に額に手を伸ばす癖がついた。今、職場のパソコンの前に座ってデータの解析をしているところだが、二カ月近く額に貼ってあった肌色の医療テープがなくなってから傷を触ってしまうのだ。化粧をしていないときは赤いボールペンで線をひいたような傷痕はまだある。けれどファンデーションを厚めに塗れば完全に隠れてまったく気にならない。触る

のは傷があることを確認するためで、指先に感じる傷の凹凸がわたしをなぜだか落ち着かせてくれる。それを見ていた男の同僚から「気にしなくても傷、全然わからないよ」と優しく肩に手を置かれながら言われた。わたしは笑みを浮かべて頷いたが、肩に置かれた手を早くどけてくれと念じていた。

「それより、最近、雰囲気が変わったね」同じ男に言われた。わたしは少し首をかしげて応えた。

ＳＭサークルに行くようになっても外見を変えたりしていない。具体的にどう違うのか気になって訊ねた。

「いやそう訊かれても雰囲気が変わったとしか言えないんだよね」と言った。

その会話を聞いていた女の同僚が横から口を挟む。

「そうだ、そうだ。そこで止めてセーフだったね」と笑った。

昨今の会社ではコンプライアンスとか言って、セクハラ事案に敏感になっている。

堅いイメージのある会社だが、仕事の内容は大学の研究室と同じなのでもともと居心地はよかった。もし、わたしの何かが変わったのだとしたら、皮膚がんと診断されたとき、人生の残り時間は案外短いのかもしれないと思ったことだろうか。これまで規範からはみ出さずに生きてきたけれど、それは自分でつけた軛（くびき）によって制限されていたのだ。幼少期に親から嫌われ容姿、元彼が触ろうとしなかった肉体へのコンプレックスはどうでもよくなった。仕事以外の時間はすべてＳＭに費やしている。ネットで海外のサイトを調べてみたり、関連の本を購入したりした。なかでも緊縛を中心としたＳＭ関連の写真は熱心に見た。写真家Ａは緊縛では有名だったが実践を伴って写真を観ると新鮮だった。

いつの間にか、画面の同じところばかり見て仕事が中断していた。画面下にポップアップしたメールの受信で意識が戻る。また男の同僚からだ。メールを開ける。一行目はさっきの謝罪が書かれていた。その次の行は食事の誘いだった。この前、この同僚の趣味がカメラだときいて、いろいろ質問したことがあった。男はそれが好意を示すものだと思ったのだろう。ＯＫの返事を送るとデスクからこちらを見ているのが分かった。

駅前ビルの中にある居酒屋を指定された。同じビルの中には何軒かカメラ屋が入っているので、そこで時間をつぶしていた。陳列されているカメラを見ても違いがまったく分からなかった。カタログをもらって店をでた。同僚との食事の席でカメラのことをあれこれ質問していたら、撮影会に誘われた。同僚はポートレイトと言って、人物を主に撮っているのでモデル撮影をすることが多いのだという。アマチュアカメラマンといえば山や鳥や花を撮るものだろうと思っていたと言うと、「鉄とお姉さんの道に入ったら戻って来れない」と言う意味深なことを言われた。

ポートレイト撮影会は奇遇にも入院中にずっと眺めていたランニングコースのある公園のバラ園で行われた。退院したときはまだ咲いていなかったバラ園もいまが満開となって

いる。バラ園には蜜を求めるさまざまな昆虫と同じ数くらいのカメラを持った老若男女がいた。花に近づいて撮っている人がほとんどで、持っているカメラも様々だ。

人だかりを抜けると、その先に円陣ができている。一緒に歩いている同僚は、もうそっちばかり見て笑い顔になっていた。二十人くらいいるだろうか。見たところ若い人はいないようだし、女性も三人しかいなかった。別に二十代前半にみえる女性が円陣から離れたところに立っている。髪は明るい茶色で肩の上で外巻きカールにきれいにセットしていた。幾何学柄のワンピースを着ているのだが、レトロ調とでもいうのか、一九八〇年代に流行した服に似ている。幼い頃に母親が着ていたレーヨンとかいう生地のようだ。。

五十歳くらいのスキンヘッドのおじさんがみんなに注目するように手をあげた。痩せて眼光鋭く、首を前に突き出して人をねめまわすように見つめる人だった。

「あの人がこの会の主催者でイチさんっていうんだけど毎月講評会をするんだ。たまに今日のような撮影会もする。講評会って言うのは、自分が撮った写真をイチさんとこでプリントしてもらってから、持ち寄って、俳句のように票を入れていくのさ。もしカメラを買うんだったら彼に相談するといいよ。古物商の資格も持ってて、中古カメラの仕入れもしてるから、欲しいカメラがあれば探してくれるよ」

同僚の首に掛かっているカメラは最新のデジタル一眼レフカメラだった。彼の場合、新型がでるとイチさんに使っていたカメラを買い取ってもらい、それを頭金にしてローンを組むのだそうだ。

「はい、これ」と同僚が差し出したのは小型のカメラだった。電源を押すと一センチほどレンズが前にでてくる。同僚のカメラのように覗くところはなく、裏面に表れる画像をみてシャッターを押すと教わった。

イチさんの話が終わると助手のような男が参加費を集めに回る。払った者から撮影を始めていいようだった。

同僚のところに集金がきた。

「二人分」

同僚はわたしを制して財布からお金をだした。

助手の男は「お連れの方はいいそうです」と言って同僚の分だけ受けとって行った。

同僚は離れたところにいるイチさんの方をみていた。目が合ったとき、大仰なお辞儀をしてみせた。

モデルの女性が白いバラの植え込みの傍で数秒ごとにポーズを変えて動いている。顔の向きや表情は何か考えているような、目線は遠くを見ているような感じだった。

三人いた女性の参加者も望遠レンズをつけた大きなカメラで撮影している。わたしもモデルに向かってカメラを向けたがもっと近くに行かないと関係ない人まで画面に入ってしまう。隣にきた同僚が「ごめんな、それ旅行用で広角だからさ」と言った。意味は分からなかったがモデル撮影に向かないのだというのは分かった。

後ろの方で立っていると、知らない男が話かけてきた。大きな望遠レンズのついたカメラ

を持っていた。
「お宅、彼の彼女さん？」と目で同僚を見ながら訊いてきた。
「違います」
男のにやけ顔が気持ち悪くて短く答えた。
「僕、こういうものです」
白い紙が差し出された。見るとそれは名刺だった。自分で刷ったと思われる名刺で写真家ウタマロとあった。あとは携帯番号と『モデルになってくれる方、お電話ください』という一文が載っていた。男が離れて行くとまた別の男がくる。その繰り返しがしばらく続いた。ある人はイチさんのこれ？　といって小指を立てる人もいた。
打ち上げの飲み会では、イチさんがモデルの紹介をした。モデルの女性はタレント事務所に所属していて、テレビにも出始めているそうだ。テレビ局に顔のきくイチさんが彼女の仕事の後押しをしたとかで恩に感じ、今回のモデルも引き受けてくれたのだそうだ。本来は撮影会のモデルなどにはもったいないと、何度も繰り返して言っていた。
男の参加者は雄叫びまがいの大声を上げて拍手している。同僚がいるテーブルが埋まっており、仕方なく座る場所を探した。女性たちは三人で同じテーブルに座りひとつ席があいていたが、わたしを見ても軽く無視されたので別の所に座った。
家に帰ってきた。もうこの写真クラブに行くことはないと思った。それは酔いも回ったころに、男たちがイチさんをなんで慕っているのかが分かったときだった。イチさんの店にはカメラ初心者の若い女の子が客としてくる。いろいろサービスをしてあげると女の子たちはすっかりイチさんを信頼する。イチさんはその中でもタイプの子に対して、誰にも見せないという約束のもとヌード写真を撮っているというのだ。たまに度胸のいい女の子は見せてもいいということになり、クラブの講評でみることもある。男たちもそれを倣って、ヌードモデルをみつけ、ラブホテルなどで撮影するということだ。撮影のあと合意があればセックスもできる。大抵はお金のやりとりで問題なく済む。卑猥な笑い声がまだ耳に残っている。
誰かがＳＭプレイがしたいと言いだした。それに何人もの男が同意の声をあげる。それに対して、かなり酔っぱらっていた女性陣が『変態』と非難していた。わたしは〈ふざけるな〉と心の中で叫んでいた。

十月にＳＭサークルのみんなが台北に行くという。わたしにもお誘いがきた。
最初にわたしを鞭で叩いたＳの女性はサークルではミズホと名乗っていた。そのミズホが、
「ねえ、バンマスよ。あんたもパレードに参加しないか？」とぶっきらぼうに言ってきたのだ。緊縛についてあまりにも熱心なのでバンデッジマスターというあだ名がついた。最近ではバンマスと縮めて呼ばれている。
「パレードってなんですか？」
と訊きなおすと、

「あんたもぐりか？　台北でアジア最大のプライドパレードがあんの。わたしたちもマイノリティとして毎年参加してる」
そういえば、時男が今年はどうしても行けないと言って残念がっていた。そのときは自分に関係ないと思って聞き流していたのだ。
「わたしも行っていいんですか？」
素直に行ってみたいと言った。
「あいよ。じゃ人数にいれとくからさ、パスポートの有効期限とかちゃんと確認しとくこと」
ミズホは手帳になにやら書き込むと離れて行った。その背中に向かって、
「あのう、リュウ君も来ますか？」と訊いた。
「来るよ」
と背中を向けたまま言った。
サークルに参加して数カ月経つが、わたしは時男を含めてまだ、数人としか親しく話はできない。人見知りということもあるが、リュウ君はいつも途中から来て、気がついたらいなくなっている。いるときは必ず人の輪の中心にいて、まだ声すらはっきり聴いたことがないのだ。
翌日、ミズホからみんなが乗るＬＣＣの便名とゲストハウスのＵＲＬが送られてきた。個人で予約をしろということだった。そのメッセージの返事に帰りは？　と訊いてみると、現地解散と短いメッセージがきた。
わたしはさっそくエアと宿の予約を入れた。宿は着いた日とその翌日、パレードの日までにして、帰りの便は会社の有給が取れる最長の日で往復にした。
保安検査場を通って、搭乗口につくと、オフ会でみかける顔がいくつかあった。わたしはほとんど埋まっている待合のシートを見回した。ミズホがいた。真っ赤なつばのある帽子を被っている。黒皮のライダージャケットに中には帽子と同じ色の真っ赤なワンピースを着ていてすごく目立っていた。
「ミズホさん、こんちには」ミズホの傍まで行き、挨拶をした。
スマホに目を落としていたミズホは顔をあげると、
「おお、由那、来たか」
と、言って笑ってくれた。
わたしはミズホが笑うのを初めてみた。
「何それ、ええカメラやん？」
ミズホがわたしの首から下げている一眼レフカメラを指さした。
「最近買いました」
気づいてもらえたのが嬉しくカメラをミズホの方に近づけた。
「今度、オフ会でわたし撮ってよ」
レンズに顔を寄せながら、ミズホが予想もしなかったことを言ってくれた。
「い、いいんですか？　まだ始めたばっかりで……」

こんなに早く機会がくるとはと、信じられない思いだった。
「いいにきまってんだろう」
いつものミズホらしい、ぶっきらぼうな口調が返ってきた。
彼女から離れ駐機している飛行機が見える窓際へ移った。写真家Ａのように緊縛写真を撮る自分の姿を想像して顔がほころんでしまう。
カメラのキャップを外し、ファインダーを覗いた。シャッターボタンに人差し指を載せて軽く押し込む。カメラの中でジャ、ジャと、モーターが動く音がする。
あの撮影会のあと、すぐに別のカメラメーカーが主宰する写真教室に入った。そこでは絞りやシャッタースピードなど基礎的なことを勉強した。講師にライブハウスで撮影がしたいがどんなカメラが必要ですかと訊いた。講師からカメラマンになるのかと訊かれたので裏方の仕事ですと答えたのが自分で可笑しかった。レンズとカメラや周辺の物を買うと三十万円以上した。本当は写真家Ａが使っているカメラが欲しかったが、フィルムカメラだったので諦めた。
ガラス越しにシャッターを切った。液晶にはわたしがこれから乗るＬＣＣの機体がクリアな画像で写しだされていた。

搭乗案内のアナウンスが流れた。搭乗口にあっというまに長蛇の列ができた。わたしは前方よりの座席だったので最後の搭乗になる。列の中に細身の長身の男性を探した。ミズホからリュウ君も毎年参加していると聞いていたからだ。
探してはいるが、わたしはリュウ君の何を知っているのだと思った。ラテックスマスクを被り全身ゴムのタイツで包まれた人形の姿のリュウ君にシンパシーしか持っていないのだった。機内はおろか、桃園空港から台北までの電車の車内にもリュウ君らしき男性は見当たらなかった。
台北駅に着くと自然とサークル仲間が集まってきた。ミズホに思い切って訊く。
「リュウ君って同じ飛行機に乗ってましたか？」
するとミズホがあっさり、
「リュウ君はさきに台北に来てるよ」と言う。
それ先に言ってよと思った。
改札を出て、エスカレーターを乗って地上階にでた。全面ガラス張りでフロアにいるのはわたしたちのグループだけだった。建物を出ると真正面に朱色の大屋根の建物が現れた。数歩歩くと、暑いと感じた。日本でも十月は合物の服で過ごせるが、三十℃と表示された気温計を見た瞬間、台湾に冬はないのかと思った。
「あれは？」
近くにいた仲間に訊く。
「駅やないか」
当然とばかりに言う。

「さっきの駅とは別なんですか？」
「そう。さっきの駅はＭＲＴっていうやつ。こっちは国鉄の駅」
その説明に納得しているうちに大通りに面した信号のところまできた。道路はところどころ封鎖されて、車道の一車線がパレードの準備に使われていた。
それをみたひとりの男性が、
「毎年だけど、これをみるとテンションあがるね」
その言葉を聞いて誰も返事はしなかったが、皆、口元には笑みが浮かんでいた。わたしは笑えないでいる。自分がＳＭに合っているとわかったことに肯定感しかなかったが友人や職場の人にカミングアウトする気は全然ない。通りを埋め尽くすパレードの装飾を見ていると違和感が膨らんでいくようだった。
大通りから十分ほど歩くとゲストハウスに着いた。エレベーターを降り、部屋に入るところにカードキーをかざさないと開かないガラスの自動扉がある。扉があくと、つんとアンモニアの臭いがした。
部屋は個室だがトイレとシャワーが共同で男女はフロアごとで分かれていた。一泊三千円ほどの部屋だが、広さは日本のビジネスホテルのシングルルームと変わらない。バスタオルや室内スリッパも揃っている。
ミズホから、近くを散策するので一緒にくるなら十分後にフロントに集合とグループＬＩＮＥがきた。簡単に荷物を仕分けして、ボディバッグに財布やパスポートなど貴重品を入れて部屋をでた。降りる前に廊下の突き当りにあるトイレに入った。アンモニア臭はもちろんここからしていると分かってはいたが、トイレの個室にはいると使ったトイレットペーパーは流さずゴミ箱に捨てるようイラスト入り英文で書かれていた。
エレベーターで一階に降りるとミズホや他の人も集まっていた。さあ出発というときにカメラを忘れてきたことに気づいて、取りに戻ることになった。先に行ってくださいと言い部屋に戻った。
部屋からカメラを持ってエレベーターホールで待っていると、上の階から乗ってきたと思われる人がいた。若い男で身長や体格はリュウ君によく似ていたが、黒いジーンズに白いＴシャツ、時計も鞄も持たないその男性が日本人かどうかもわからなかった。結局、彼の後ろに立って凝視するだけでエレベーターは一階に着いた。
若い男はフロントにいるスタッフとひと言、ふた言、台湾語で言葉を交わしている。やっぱり違うのかと思い、フロントを通り過ぎようとしたとき、若い男と目が合った。
「こんにちは」
と声をかけられた。
驚いて、
「日本人？　ですか」と訊いた。
「そうですよ」と言って、若い男は顔に覆いかぶさった黒い髪を左手で梳き後ろに流した。
わたしの頭の中は彼がリュウ君かリュウ君でないかでせめぎ合っている。だいたいリュ

ウ君が終始、ラテックスマスクをして、誰にも素顔をみせない理由も知らない。彼にリュウ君ですかと訊いて、もしそうだったとしても認めてくれるだろうか。
「君、もしかして明日のパレードを見に来たの？」
これってもしかしてチャンスかと思った。若い男に対して、わたしたちは見物ではなく参加するために来たと言おうとしたが、ＳＭサークルのみんなも泊まるこのゲストハウスのスタッフの前で参加すると言っていいのだろうかと思い、言い淀んでしまった。
「そのカメラ、いいカメラだね」
若い男は話題を変えてくれた。
「はい、まだ始めたばっかなん……」
言いかけたときに、携帯が震えた。同時に若い男の携帯も何かの着信の音がなった。
見るとミズホからのグループＬＩＮＥだった。いま、台湾のＳＭの仲間と連絡が取れて、今日の夜は交流会でその人たちの集まる店に行くことになったという内容だった。
同時に携帯から顔を上げたわたしと若い男はお互いの画面にでている文面を見比べた。
「やっぱり。そうだよね。君の顔覚えてるよ」
若い男は言った。
「時男君の彼女だよね」と続けた。
「ええ、そうです！」
心臓の音が彼に聞こえているのではないかというくらい、大きく脈打っている。
「でも、わたしはお顔に見覚えがなくて……」
もしこれで彼がリュウ君なら決定的な言葉が出てくるはずだと思った。
「そうだよ。顔は見せてない」
彼はおどけて言う。
（それはなぜ？　どうしてここでは普通なの？）
わたしは言葉が出てこない分、まばたきの回数が多くなった。何か言わなくてはと焦っていると、
「君、いつも遠くから僕に話しかけてくれてるでしょう」
目の前にラテックスのリュウ君が突如現れた気がした。
「うそ！　話しかけていること分かってたんですか？」
緊張が一気にほぐれた。
「うん。何て話しかけられてるかは分かんないけどね」と言って笑う。
「いつもされてるマスクは日本だけなんですか？」
今度はためらいもなく訊けた。
「そうだよ」
リュウ君はまた顔に覆いかぶさった髪を後ろに流した。
「外に出てみる？」
リュウ君は陽の落ちかかった通りを見上げて言った。わたしが頷くと、ちょっと待ってて

と言い、部屋に戻って行った。降りてくるとTシャツの上にグレーのカーディガンを羽織り、リュックを持ちサングラスをしていた。
「君って緊縛に興味があるの？」
通りを歩きだすとリュウ君が訊いた。
「まだ自分でも分かってないと思うのですが、縛りには興味があります。あの、これ見てもらっていいですか？」
わたしはそう言うと、携帯に保存している写真をみせた。そこにはクマのぬいぐるみとカメラにそれぞれ縄を巻いて縛った姿が写っている。
「なにこれ、でもめちゃめちゃかわいいじゃん」
リュウ君が笑ってくれたのでうれしかった。
「もうなんでもかんでも縛りたくなるんですよ。家にいてテレビ観てるときも、観ながら縄をこうしてなめしてるんです」
わたしは新品の縄に馬油を刷り込む手つきをした。
「君ってユニークだね」
そう言って笑うリュウ君はバリトンで暖かみのある声をしているのだと改めて思った。

歩き出して、三〇分もすると陽が落ちて薄暗くなった。交流会の時間まで夜市に行こうと誘われて台北駅のすぐ傍の道を歩いて行く。ビルが立ち並んでいるのは大通りやそれに交差する通りの一部だけで、路地一本中に入れば時間が巻き戻されたかのような鄙びた饅頭屋だったり、店先に蒸気の湯気を吐き出すラーメン屋がそこかしこにある。
夜市に到着するとそこは、日本の大きなお祭りのときのように出店がでて通路は人が帯のように流れている。人の流れのなかに交じり歩いていると、日本では見かけないスイカのジュースを売る屋台があった。わたしはそれを買い、リュウ君は焼いた肉まんみたいなものを買って食べていた。夜市で物を食べる人たちを狙ってシャッターを切っていると、リュウ君がこちらをじっとみている。
「どうかしました？」と訊いた。
「君にはボーダーを感じないんだよ」
「ボーダー、ですか？」
リュウ君は頷いて、
「僕は別の人間になるためにやってると思う」
「人形は強い……」
ふいに前に見た夢のセリフがでた。
「え？」
不思議そうな顔をされた。
「わたし、リュウ君を最初に見たとき、子どものとき遊んでた人形と同じ雰囲気を感じたんです」

「人形？」
今度は顎を引き、考え込むように眉間にしわを寄せた。
「人形はとっても大事だったんです。人形はわたしの身代わり。嫌なことを全部代わってもらってました。あ、その、空想の中ですよ、もちろん。そこでは人形と意思の疎通ができるんです。リュウ君を初めて見たとき、同じだ、リュウ君は人形と同じだと直感したんですね。さっき、話しかけてたでしょって、言われたとき、びっくりはしましたけど、やはりそうだったんだって」言い終わってから、何を言ってるんだと恥ずかしくなった。
ひと呼吸おいて、
「よくわからないな。君にとって僕が子どもの頃の人形と同じだってこと？」
「……同じというより、子どものときに出来ていた人形との意思疎通をリュウ君とできるんだという確信があったんです」
「ふーん」
リュウ君はそれきり何も言わなかった。
黙って肉まんを食べる横顔をちらちらみながら、わたしもスイカのジュースをストローで吸っていた。スイカのジュースは少し青臭くて甘かった。
夜市の続く長い一画を抜けると急に人はまばらになった。その境目となっているのが大門だ。大門をでてすぐ左手に寺院があった。閉門の時間が迫っているようだが夜市を抜けてきた人の何人かが入っていく。
「行ってみません？」
入口に置かれた大きな線香台から流れる煙を浴びながらリュウ君を誘った。
「僕はいいよ。君だけいっておいで。ここで待ってるから」
笑った顔は文句なく優しさが溢れている。やっぱりリュウ君はわたしの人形たちと同じだと振り返りざま笑みがこぼれる。
寺院の中はうす暗く奥にいる仏様は見えなかった。四本の支柱に囲まれ鎮座する、その前に参拝者が並ぶ台があった。それは音楽教室にあった斜めの教本を置く台のようだった。
数人がお祈りをしているので観察していると、その本を読み上げ、筮竹ほどの長さの線香を手に持っていた。
五分ほどで外にでてくると、リュウ君は同じ場所で携帯を見ながら立っていた。
「ミズホさんからＬＩＮＥきてない？　今日の交流会で僕と君に縛りのリクエストがあるんだって」
「マジですか……」
わたしは怖気づいてしまった。

店のドアを開けると低温ロウソクの蝋の溶けた匂いがした。アロマ系のロウソクと違い無香料のロウソクの匂いだ。
リュウ君は店に入るとまっすぐトイレにむかった。でてくると、マスクと全身ゴムのいつ

もの姿になっていた。
わたしもすでに何度も経験していたが、さっきまで観光客然として夜市を歩いていたのに、知らない人も含めて大勢の前で服を脱ぐのは勇気がいった。
台湾で有名な縄師によってわたしは「花瓶縛り」を施された。膣を傷つけないように花の茎にティッシュを巻き、さらにコンドームをはめて花を生けるように膣に茎を差し込まれていく。
あたりは息遣いしか聞こえてこない。肉に食い込む縄はわたしの胸に詰まったものを絞り出すように排出している。人の手を借りて自分が解き放たれていく。この快楽はわたしの核を目覚めさせることで感じているものなのだ。苦痛は癒合した核が動き始めたから起こる。はっきりとした喜びが訪れるとき、肉体は快感の絶頂を感じる。そして心の中は澄みきっていった。
わたしは涙を流しながら快感を享受していた。隣ではリュウ君がわたしの人形たちと同じように苦しみを彼の深く暗い穴に吸い取っていた。
縄を解かれ放心しているわたしにミズホが手招きしてきた。
「ここの主宰にバンマスのこと、カメラマンかって訊かれたからそうだって言ったら、ここの記録写真を撮って欲しいって言われたよ」
ミズホが隣にいる男性に親指を向けた。
「いいんですか？」
間髪なく、
「いいって言ってんだろ」
と怒られた。
主宰がわたしに撮影の許可をしたと話してくれたおかげで、店の中を自由に移動して写真を撮ることができた。
汗だくになりながら撮影していたわたしの傍にリュウ君がきた。夕方街中を歩いたときの私服に戻っていて、もうすぐお開きになると教えてくれた。それを聞いて、カメラを下ろすと周囲から手を叩く人や笑う人たちと目があった。リュウ君がハグや握手をしているのを至近距離でまた撮った。
「ボーダーを感じないって、いうのはこのことだったのかな。君は人とすんなりとけ込んでしまう。オフ会でも大学生がゼミで講義をうけているような生真面目さで次々と難しい縛り方を覚えていったし、今日だって」
店を出てゲストハウスに向かって歩いているときにリュウ君が独り言のように言った。
パレード当日は想像以上の人が街にでてきており、ＬＧＢＴＱの文字やレインボーフラッグが通りを埋め尽くしていた。世界最大規模と言われているだけあって、さまざまな人種、国の人たちがグループごとに練り歩いている。沿道にはマラソンのときのように大勢の人が集まっている。

寝るときにバッテリーを充電しておいたカメラは歯切れよくシャッター音を鳴らし、メモリの中に昨夜とは違う仲間の姿を納めていった。ただ違和感があったのは、他のグループはせいぜいサングラスをかけるくらいなのにわたしたちのグループは誰一人素顔を見せていなかったことだ。金髪のカツラを被り真っ黒なサングラスをしたミズホの横に並び、わたしも近くの店で買ったバッドマンのマスクをして歩いている。パレードがスタートするまではそんなものかと気にも留めていなかった。

「どうしてわたしたちのグループは顔だしＮＧなんですか？」と訊いた。

「台湾は全体的にまだ伝統的な考えや偏見が強いんだとさ。特にＳＭイコール病的って認識だからさ、絶対顔バレはしちゃいけない。わたしらも顔出しして彼らに迷惑かけちゃだめでしょ」

それを聞いて改めてパレードを見回した。

職場の同僚に誘われて参加した撮影会で、酔った男たちがＳＭプレイの写真を撮りたいと言っていたことを思い出した。あの場にいた女性たちが「変態」と野次っていたことも。

わたしは自分が変態だとは思わない。信頼できる仲間がいて、自分も仲間も日頃の束縛を離れて打ち込んでいる。わたしが魅かれるのはそのときの一生懸命な姿や解放感なのだろう。

ゲストハウスのフロントまで降りてくると、早立ちの仲間たちがキャリーバッグを持って集まっていた。昨日のパレードの余韻が感じられる。よく見ると、二日間一緒だった台湾人の仲間も見送りに来ている。

「リュウ君は？」彼の所在を訊いた。

「もう出たんじゃないかな」リュウ君と同じフロアに泊まっていた男性が言った。

すっかり友だちになったつもりだったので、黙って帰られたことに少なからずショックを受けていると、

「おい、バンマス！」

ミズホに呼ばれた。

「お前、このあと予定決まってんだっけ？」

「一応、決めてますけど……」

帰国日を含めると四日間滞在できる。台湾は初めてなので「千と千尋の神隠し」のモデルになった九份に行ってみたいと思っていた。

ミズホは自分の隣に立っている台湾人の女の子をみた。

「この子、台中のアート系のギャラリーで働いてるんだけどさ、お前に、台中に来ないかって言ってる」

台中と聞いて思い浮かんだのは「彩虹眷村（さいこうけんそん）」だ。

「まだ宿も列車も予約してないので……。だったらお願いしようかな」

英語で話かけようとしたら、
「大丈夫です。日本語少しできます」
と彼女は言った。
「植村由那といいます」
「わたしはチョウライです」
「台中の南屯区って、あなたの働くギャラリーの近くですか？」と訊いた。
「近くじゃないけど、車持ってるから案内しますよ。レインボービレッジですね」
わたしが首を傾げると、おじいさんがひとりで描いた派手な家しかないけどと付け加えた。
ミズホたちを送り出すと、わたしもすぐにチェックアウトをした。
列車で行くのだと思っていたら、彼女が高速バスの方が安いと言った。バスターミナルに行くのもチケットを買うのも彼女がいたのでスムーズに運んだ。
隣同士に座った席で彼女が話しだした。
「わたし、日本で仕事がしたいです」
「そうなんだ。美術関係の仕事？」
違うと首を振った。
「日本人のボーイフレンドがいます。いっしょに住みたいから仕事は何でもいいです」
日本の彼氏もＳＭで知り合ったという。
「チョウライはいくつ？」
「二十三歳」
「日本に来れるといいね」
パレートのとき聞いたように台湾でＳＭ嗜好をもって生きることは大変なことだろうと思った。それを裏付けるかのように、チョウライは日本ではＳＭの写真が雑誌や写真集になって本屋で売られていることが羨ましいと言った。
バスの中で彼女は日本のことをたくさん質問してきた。三時間も経たず台中にバスは着いた。チョウライは午後から夜の八時まで仕事があるというので、ギャラリーに向かった。戦前は日本資本の会社だったというビル全部をアートギャラリーにしていて、レトロビルと現代アートの組み合わせが一層キャッチーな印象を醸していた。
キャリーバッグを預かってもらい、駅周辺を散策することにした。カメラを持って歩いて

いると、わりと人からジロジロと見られるのだということが分かった。人にレンズを向けるのはやめておこうと思った。代わりに、古い建物や植栽や食べ物屋の店先などをカメラに収めていく。

駅から十五分ほど歩くと「第二市場」と看板のあがった古めかしい市場が現れた。お腹も減ってきたのでその中で何か食べることにして行ってみた。

街中はにぎわっていて、ただ歩くだけでも楽しかった。チョウライからは疲れたらいつでもギャラリーに戻って休んでよいからと言われていたが食料品を売る店を冷やかしたりしてあっという間に時間は過ぎた。

ギャラリーの閉まる一時間前に戻ってきた。ガラス張りのギャラリーの中にはチョウライ以外に男女数人がいた。

来たときは玄関先で荷物だけ渡してでたので、中の展示は観ていない。

ドアを開けるとみんながこちらを見る。どうやらお客はおらず、ギャラリーのオーナー夫婦と併設されているラボで働いている人たちだった。ラボで働いている人はみなデニムの前掛けをして、昔の事務員さんのように袖口をカバーする黒い布で筒状の腕カバーを付けていた。

台中滞在中はチョウライの一人暮らしのアパートに泊めてもらうことができ、とても助かった。なにより、食事は地元の人しか行かない店に連れて行ってもらうのが楽しみであった。大衆食堂では鳥、豚、魚、野菜料理と何でもあり、瓶ビールはセルフで冷蔵庫から取ってくるようになっていた。ご飯は日本と同じ種類の米で炊かれていたが、何杯食べてもよいし、これもセルフサービスになっていた。どれも美味しくて、いましか食べられないと思うと食べ過ぎてしまう。店を出て外を歩いているとき、わたしの下腹は妊婦のように膨れており、チョウライはそれを見て毎回笑うのだった。

チョウライの休みの日に彼女の運転で彩虹眷村（さいこうけんそん）に連れて行ってもらった。空き地の片隅にカラフルな彩色の家が建つ一画があり、周りは普通の街といったところだった。赤を基調にした外壁が小径を挟んで数十メートルくねくねと続いている。その家々が土産物屋になっていて、絵葉書を何枚か買った。

帰国する前夜、チョウライから縛って欲しいと言われた。わたしから何度も言い出そうとして言えなかったことだったので、高揚感が半端じゃなかった。お互い経験が浅いこともあって、それぞれのやってみたいことを言い合い、必要なものなどをノートに書き出していった。わたしが忘れられない思い出になったのは、逆海老吊り縛りをしたことだった。

チョウライの白く弾力のある肌のうえを縄が滑るときの微かな摩擦音が徐々に興奮を高めていく彼女の呼吸と重なっていく。この縛りは最初、直立してもらい、後高手小手縛りにしておいてから、足もフックにかけて吊るすというもの。彼女の家にはもちろん天井にフックなどなく、部屋の中の床から天井まである造り付けの大きなタンスを使った。

洋服を掛けるバーの強度を確認すると思ったより頑丈だったのでちゃんと吊るすことが出来た。そこからはお互いに興がのり、縛り方を変えては撮影する、を繰り返していた。

気が付くと朝だった。チョウライは素っ裸でわたしもいつのまにか服を脱いでブラとパンツだけの姿で寝ていた。体を動かすと胸の中にすっぽりカメラが挟まっていた。肌からはがすようにカメラを引き出すとカウンターを覗いた。八三九回シャッターを切っていた。

わたしが動いたのでチョウライも目を覚ました。裸なのに気づくと、昨日タンスを空にするため外に出した服の山からスエットの上下を取り出して着ていた。空になったタンスを眺めていると昨夜の事が夢じゃなかったのだと改めて思った。

台中駅から桃園行きのバスターミナルまで送ってくれた。次はチョウライが日本に来ることになっている。その時は家に泊まるよう約束した。日本で働きたいと日本語を勉強しているので、どんな仕事があるかなど調べてメールすると言った。バスに乗る間際、チョウライと強くハグをして別れた。

帰国し一週間ぶりに職場に行って感じたのは、嘘くささだった。

わたしは定番のパイナップルケーキを配ったり、仲のよい同僚にはレインボービレッジで買った絵葉書やちょっとした小物を渡しながら、聞かれるままに旅の感想を話した。わたしもあのパレードでマスクをしていた仲間と同じく、職場では自分を隠している。ほんとは一番楽しく感動的だった話をできない。

以前、撮影会に連れて行ってくれた男の同僚が近づいてきた。

「どんな写真撮ったかみせてよ」と言う。

「いろいろ撮り散らかしちゃってるので、データ整理してからプリントしてきますね」

と答えておいた。

同僚はわたしがフラッグシップのデジタル一眼レフカメラを買ったと知ったら騒ぐだろうなと想像した。

データの整理はチョウライに渡すためにも必要だった。撮影した写真をパソコンに取り

込んでセレクトしているとき、これを印刷にしてプレゼントするアイディアが浮かんだ。あれほどたくさん撮っていても、これだと思うカットは一割にも満たなかった。普段撮っている写真はオフ会の喧騒を撮っている。手持ちのカメラで揺れたりブレたりすることが場の雰囲気に合っていたのだが、チョウライを撮ったものはカメラを固定させ撮る写真だった。

モノクロ縦位置で撮った写真を各ポーズに一枚ずつセレクトして一ページ十二カットを二十ページ分構成できた。それらをパソコンのモニター一面に並べてみる。縦横四列列三段にならんだ写真はインデックスのようで情緒が一切感じられない。それが面白いと思った。

カメラを始めようと思ったのは写真家Ａの緊縛写真をカメラ雑誌でみたことだった。Ａの写真は屋外でＯＬ風の女性であったり、古民家の座敷で和装の女性であったりとどれも作家の思惑が入ったメイキングものだった。雑誌を見ながら、自分ならどんなシチュエーションを想定するだろうと考えるのが楽しかった。今回、タンスを使ったのは吊るすところが他になかったからだったが、モニターの写真を観ていると、タンスこそがわたしにふさわしい場所だと思った。

わたしはチョウライにこの前の写真を冊子にしてもいいかと、英文でメールを送った。そのときにパソコンに並んだ彼女の写真もスクショして一緒に送った。

チョウライからの返事はすぐには来なかった。それこそが彼女の返事なのかもと思うと、高ぶっていた気持ちが不安に変わっていった。

数時間後、チョウライから返事がきた。

〈由那が写真で表現しようとしていることに協力したい。でも怖い〉

この返信は日本語で送られてきた。

わたしも安易に大丈夫とは言えなかった。すると、また

〈やりましょう。『櫃子里的人』と書いてきた。

翻訳アプリで調べると『キャビネットの人』とでてきた。

わたしはそれを冊子のタイトルに決め、表紙のデザインや中のレイアウトをパソコンで作っていった。

印刷所から写真冊子が送られてきた。ページを繰りながら興奮で体が熱くなる。縛りの精度や何度もセレクトを繰り返して決めた写真のひとつひとつにわたしとチョウライの熱が注がれていると感じられたからだ。

チョウライはこのタイミングに合わせて日本に来ることになっている。台湾人の仲間と数人で来るというので、ミズホに相談すると急遽、オフ会を開いてくれることになった。

部屋に届いた段ボールから写真冊子を一〇〇冊取り出し、リュックの中に入れて出かけた。嵩はそれほどでもないのに、紙というのは結構重たいものだと、後ろに引き倒されそうなリュックの重みに耐え、電車のつり革を持っていた。

店はまだ通常営業の時間のはずだったが、扉を開けると、オフ会のメンバーで満員だった。わたしに向かって悲鳴のような高い声を上げて走ってくる女の子がいた。チョウライだった。わたしたちは抱き合い、飛び跳ねながらぐるぐると回った。

主宰のバーのオーナーがわたしたちを呼んだ。わたしたちはもつれる様にして舞台のところまで行く。歩きづらいと感じていたのは重いリュックを背負ったままだったからだ。

「ちょっといいか。聞いてくれ」

主宰は店が静かになるまで間をおいた。

「今日は特別のオフ会を開くことになった。あちらに台湾からのお客もいらしている」

そう言って赤いソファの一画に向けて手を差し出した。自然と拍手が沸き上がった。

「それから……」

今度はわたしたちに向き直って、

「バンマスが写真冊子を作った。モデルはここにいるチョウライだ。今日、持ってきてるんだな？」とわたしに訊いた。

わたしはリュックのショルダーを掴み頷いた。

「じゃあ、どうぞ」

と言って、いきなり振られた。

「え、どうぞって言われても……」と主宰に小声で訊いた。そもそも、ここで写真冊子のことを紹介されるとは思っていなかったのだ。

「この会の公式カメラマンです」

主催は笑いながらわたしを前に押し出した。

「あ、ええっと、わたしとチョウライは台湾のパレードのあと、彼女の住む台中に一緒に行きました。それがきっかけというか……。ねっ？」

わたしはチョウライに助けを求めた。彼女は両手を振って、わたしに戻した。

会場から笑いが漏れた。

「わたしは経験も浅くて、自分ですべて決めて縛るのは初めてで。チョウライとプランをたてました。その過程で縄を吊る場所がなくて、彼女の部屋の大きなタンスに丈夫なバーがついていたのでそれを使っていろんなポーズを撮影しました」

〈みんなに配ってもいい？〉チョウライにだけ聞こえる声で訊いた。

「はい」と返事が返ってきた。

リュックを床におろし、ファスナーを開いた。一冊目はチョウライに渡した。

皆の手にいきわたると、店は静まり返った。紙の擦れる音とスピーカーから音を絞って流れるボサノバの音楽だけが鳴っている。

「すごいなあ」

沈黙を破ったのは台湾にも一緒に行った仲間の男の人だった。

「キレッキレ」

また誰かが言った。みんなわたしの縛りの技術をほめてくれているが、わたしはチョウライの反応が気になって仕方がない。隣で黙ってページをめくっている。ライトに照らされたチョウライの耳が赤く染まっている。それがライトのせいなのか彼女の反応のせいなのかわからなかった。

「すごいです。由那」

顔をあげたチョウライの顔は紅潮していた。

「グイズゥリダァリャンはね、棚の中にいる人という意味。もうひとつ中国語の意味、チュウグイがある。意味はカムアウト」

と言った。

「え、なになに？」中国語の交じったチョウライの言葉が聞き取れなかった。

するとチョウライは携帯電話を取り出して画面に写真冊子のタイトルになった『櫃子里的人』と『出櫃』のふたつの漢字をだして、それぞれ発音した。チュウグイがカムアウトという意味で櫃子里的人にはダブルミーニングがあると教えてくれた。

「わたしはカムアウトできたね」

チョウライがいうにはタンスの中に入って写真を撮られたことによって外に出られたのだと言う。

「すっかり追い越されたな」

背後からわたしを抱きすくめて時男が言った。時男とは台湾に行く直前に会ったきりだ

った。
時男は誰も注目していないステージからわたしをおろした。チョウライが気になって振り返ってみるともう別の人と話をしているので、時男に連れられるまま店の隅のテーブルについた。
「由那のこと誘ってよかったよ」
時男はわたしの写真冊子を見ながら言った。
「わたしこそだよ。今は生きてて、ほんとに楽しいと思える」
オーバーだなと時男はわたしの頭を撫でた。
「最初にここにきたとき、師匠に訊かれたの『自由ってどんなものだと思いますか？』って。で、その時は、よく考えもしなくて何でも自分で決められることですかと答えたんだけど……」
話を切って時男をみると、それでという顔をしている。
「なぜ緊縛に魅せられてるのかなって真剣に考えたの。だって、緊縛は自由を奪うことでしょ。なのにオフ会に来て緊縛を体験するたびに満足している。それは何故なのか」
「それなら師匠が言ってたことあるよ。自由が素晴らしいとか言ってても、結局人間って奴は縛られて安心するんだって。組織や宗教そういうやつにね。緊縛は実は組織や宗教の対極にあるものじゃないかな。自由は孤独だよ。けど孤独は自律だ」
わたしがここと出会えたことを喜んでいるのはそういうことだったのか。これまでは仕事や社会的立場、価値観なんかで自分が座標上のどこにいるかを他人の目を通して確認する。そして安心していたのかもしれない。
時男の手がわたしの着ているパーカーのファスナーにかかった。それをゆっくり脱がせるときれいにたたんで椅子の上に置いた。下にきている白いセーターを下からめくりあげる。その下に黒い長そでのヒートテックTシャツを着ているのをみて時男はぷっと噴き出した。
時男はわたしを下着姿にするとテーブルの上に乗せ胡坐の姿勢をとらせた。重ねた足首からふくらはぎに二つ折りにした縄を巻き付けていく。一旦結び目をつくり、両太ももとふくらはぎの間に縄をまわし一回フックさせた。これによって曲げた脚が自由に動かないよう固定するのだ。最後に縄先を首に回し体を前に倒させた。かなり苦しい姿勢で我慢しなければならない。

そこへミズホが来た。
鞭の音と遅れて痺れるような痛みが襲う。
二度、三度と鞭が続けざまに振り下ろされた。痛みの山が過ぎると、えも言えぬ疼きが波になってやってくる。
「バンマス、うちらもあんな写真集作れよ。この前見せてくれたやつとかさ」
ミズホの言うのは、リュウ君を縛ってミズホが叩いている写真のことだろう。記録としてオフ会の会場写真はたくさん撮っていた。その中でもリュウ君の写真は断トツで枚数を撮っていた。
わたしもチョウライの写真冊子を作っているとき、リュウ君をモデルにした写真冊子も作りたいと思っていた。日本では素顔も見せないほど身バレを警戒しているリュウ君から自分がモデルの写真冊子に許可をもらえるとは思わなかった。
縄を解かれ服を着ると、酒をもらいにバーカウンターに向かった。
カウンターの中にはリュウ君が入っていた。いつものラテックスマスクにビニールのタイツ姿で。
「リュウ君、台湾のとき以来だね」
わたしは台湾でみたリュウ君の素顔を思い浮かべながら言った。
「君はまた進化したね」
リュウ君はわたしの写真冊子を取り上げて言った。
「あの……。リュウ君をモデルにこんな写真冊子を作ってもいいですか？」
リュウ君は写真冊子をゆっくりカウンターにもどした。
「あ、でもこれと同じじゃないです。リュウ君の写真はこれまでもここのオフ会のときに撮り溜めたものがあるし、作るとしたらここの空気感を含めたスナップショットが中心になると思うんです」
ミズホの言葉がわたしの背中を押していた。
「それ、ここのオーナーやミズホさんにも言われた」
すでに知っていたようだ。だが、リュウ君に嫌な思いはさせたくない。
「いいよ。君に協力する」
そう言って、リュウ君はカウンターの上の写真冊子をじっと見つめていた。
写真冊子を作ることを決めてから、改めて撮り溜めていた写真を見返すとどうも気にい

らない。最初のころは遠慮をしながらシャッターを切っていた。それが写真にも表れているのだ。画面の中で何を撮りたいのかがでていない。それにカメラに付いているストロボを使っていたのでレンズフードでケラれているものが何枚もあった。

そこで外付けのストロボを購入して撮ることにした。

それともうひとつ自分に課したのは、自分も縛られること。もちろん縛られながらなど撮れるわけはない。オフ会のたび、わたしは時男に縛ってもらい、極力、リュウ君の状態に近い自分を作っておくことにした。リュウ君に対して持っている気持ちは初対面のときから変わっていない。わたしの身代わりだった人形と同じ、共感と救済の人だった。

新調したストロボの性能なのか、リュウ君を撮っていると、マスクで表情など写らないはずなのに写真には歪んだ表情がみえる。ビニールのタイツは光沢がありストロボを跳ね返し、それはミラーボールで光をまき散らしたようにハレーションを起こしていた。

撮影に入る前に縛られた余韻が残っているため、リュウ君とミズホの間に寝そべって撮ることもあった。そんなとき、ミズホはわたしのお腹を足で踏みつけ、ときにわたしも叩くことがあった。

編集をするときには、コントラストをあげて生々しさを出そうと思った。仲間たちもカメラを意識して気の抜けたような顔をしている者は誰もいなかった。そこはまるで暴力現場に突入して撮った写真のように臨場感のあるものになった。

写真冊子のタイトルは人形と魂というふたつの意味を込めたいと思った。ラテックスマスクの人形だから、Ｒｕｂｂｅｒで魂のＳｏｕｌを引っ付けて、『Ｒｕｂｂｅｒ　Ｓｏｕｌ』にした。

刷り上がった写真冊子を仲間たちが集まるオフ会に持っていった。

表紙も中身も裁ち落としで見開きのカラーにして作った。表紙は床に寝て撮っているわたしの脚も写り込んでいるカットにした。

主宰がタイトルについて、

「お、ビートルズのアルバムの名前から取ったのか？」

と言った。

「え、そんなアルバムがあるんですか？　知らなかったです」

わたしは単語を組み合わせただけだと言った。

「そうか。でもこれは面白いタイトルだぞ。ラバーソウルってゴム底の靴の意味だろう。で

な、これって和製英語なんだ。イギリス英語だとブローセル・クリーパーズっていうんだ。ブローセルが売春宿でクリーパーズが這う人って意味。音を立てずにこそこそ歩けるってことらしい」

「まじですか？　じゃ、本家のビートルズもそういう意味を込めてるんですか？」

もしそうだったら、リュウ君が知ったらどう思うだろう。

「いや、そっちは違う。有名なアーティストの音楽をブルース奏者か誰かが、プラスティック・ソウルだとこけおろしたのを耳にしたビートルズがじゃ、俺たちはプラスティック以下のゴムで行こうって、なったって。ダジャレだな」

こっちのほうなら大丈夫かと妙にほっとした。

仲間たちに写真冊子を配り終えたらタガが外れてしまったのか、久しぶりに熱を出して何日も会社を休むことになった。ひとり暮らしで病気をしてしまうと食事が一番大変だ。ストックしているレトルト食品や冷蔵庫のものはすぐに無くなり、ここ二日は水だけで過ごしていた。時男やミズホから写真冊子について興奮したＬＩＮＥメッセージがきたが、体調のことは知らせずに返信した。

リュウ君がわたしのことをボーダーレスだと評したとき、どこを見てそんな風に思ったのかと謎だった。現にわたしは大学時代の友だちや職場の仲のいい同僚にＳＭや写真冊子のことは話していなかった。時男やミズホはわたしの仕事やＳＭ以外のプライベートは知らない。

水を飲みにキッチンに立った。壁掛け時計が六時半を指している。遮光カーテンを引いているので朝なのか夜なのか時間感覚がなくなっている。テレビをつければ分かるだろうとダイニングテーブルの上のリモコンを取った。と、その時ドアチャイムがなった。オートロックの部屋なので直接部屋まで来れるとしたら、職場の同僚のあの子しかいない。何度か泊まりにも来ていて、暗証番号も知っている。

わたしは咄嗟に部屋を見回した。散らかっていることはかまわないが、チョウライとリュウ君の写真冊子がそれぞれ段ボール箱に入って蓋が開いているし、パソコンデスクやダイニングテーブルにも写真プリントがそこかしこに散らばっている。

段ボールの蓋を閉め、目についた写真プリントはかき集めて引き出しにしまった。それからゆっくりとドアのところへ行った。

チェーンを掛けたままドアを開けると、やはり同僚の女の子が立っていた。スーパーに寄ってきたのか、レジ袋から野菜が飛びだしているのがみえた。もう一度ドアを閉め、チェーンを外してからドアを開けた。

「心配で来ちゃった」

同僚はレジ袋を高く上げてみせた。

「ありがとう。熱がでて動けなかったの。もう熱は下がったと思うんだけど、買い物に行けなくて……」

彼女は分かっていると大きく頷いて、部屋にあがってきた。

「クラムチャウダー買ってきたからレンジで温めてあげるね」

「あとポカリとヨーグルトも」

出来たよと声を掛けられてキッチンに行くとテーブルの上にはパプリカやブロッコリーの色鮮やかなクラムチャウダーが深めのお皿に盛られていた。

「これもどうぞ」別の深皿を差し出した。ニンニクの香りが鼻をくすぐる。

乾燥したタラとカブ、唐辛子にニンニク、生姜が入ったスープだった。ワカメだと思って食べたものはメカブで素麺のようにつるっと喉に落ちていった。わたしは物も言わず食べ物を口に運んだ。同僚はその様子を満足げに眺めながら、自分用に買ってきた総菜パンとインスタントのコーンスープを飲んでいる。

わたしが食後のヨーグルトを食べているとき、

「一つ訊いてもいい？」と言った。

「今年の夏くらいから何か始めた？」

「え？」

わたしはヨーグルトを口に運ぶのを止めた。

「だって前はよく食事や映画にも一緒に行ってたじゃない。それが、ここんとこ全然、誘っても断るし。台湾旅行もひとりで行っちゃうし」

同僚は責めるふうではなく質問してきた。

「ごめん……」

わたしはそれしか言えなかった。

同僚が帰ったあと、わたしはトイレに入った。その瞬間、全身がかっと熱くなった。トイレの戸をあけると水洗タンクの後ろ側にある飾り棚が目に入る。そこにはポプリを入れた

ボウルが置いてあり、同じ場所にチョウライとリュウ君の写真冊子がそれぞれ置いてあったのだ。
同僚がわたしに質問してきたのは、彼女がトイレに行ったあとではなかっただろうか。表紙に書かれた名前はわたしの本名だし、奥付にもあとがきもわたしが書いたものだと分かる。たぶん見ただろう。

ひと月ぶりにオフ会に出た。わたしを見つけた主宰が手を振りながら駆け寄ってきた。
「やっときたか。あのな、お前の写真集をみた人が写真展をやってはどうかって言ってきてるんだ」
主宰はわたしの写真冊子をいつも写真集と言う。これは冊子だと訂正すると、写真集とどう違うのだと訊いてくる。自分でもよく分かっていないので写真集はもっと立派な造りの本ですと答えるしかなかった。
「どうなんだ？」
「……」
わたしは何を言われていたのか聞いていなかった。
「え、はい。なんでしたか？」
ため息を吐き出すように「写真展。はぁもう」と言った。
いったい誰が見たのだろう。印刷した写真冊子は仲間に配った分以外はわたしの家に置いてある。
「わたしはここの皆さん以外にはお渡ししてないですけど、どなたが見られたんでしょう？」
「お前、ネット見てねえのか？　画像結構上がってるぞ。それに一旦自分の手を離れたら、写真だってひとり歩きを始めるってさ」
「写真展をしたいって言ってきたのは、この界隈じゃ有名な写真家の聖地みたいなバーだよ。なんとかっていう国際的写真家グループの人もそこで展示したんだとさ」
そこなら知っていると思った。
「どっちの方ですか？　あの写真展をしたいって言っておられるのは」
「リュウ君の写真集を見たっていってたから、たぶんそっちだろう」
リュウ君はどう思うのだろう。

「承諾はもらってるぞ。あとはお前次第だ」
主宰はわたしの考えていることが分かったかのようにリュウ君は了承済みだと言った。
それなら躊躇することはないと思った。
「やらせてもらいます」
それを聞いてオーナーは誰かに電話をかけ始めた。
「お前、バーの場所わかるか？　今から来いって」
電話を切るとそう言った。
「分かります。じゃ、行ってきます」
わたしが店を出る時、集まっていた仲間が拍手で送りだしてくれた。
その店は狭い階段をのぼった二階にあった。入口の壁には写真展のＤＭやポスターが一面に貼ってある。
ドアの前に立つと急に緊張してきた。ドアの取っ手を掴み引っ張ってみた。ドアはぴくりとも動かない。今度は押してみた。同じだった。取っ手の上に突起がでていて、それを押し下げてみたらドアが店の側へすっと開いた。
体を一度店の中に入れてからドアを押して戻す。カウンターだけの店で客は三人いた。カウンターの中の人に名前を言って挨拶をすると、客だと思っていた男の人が立ち上がった。
「やあ、今日連絡もらって丁度よかったよ」
男の人は店の名刺を差し出した。
「こちらがあなたの写真がすごいって写真冊子持ってきて来られた合田さん。芸術大学の写真学科の教授をされてる方です」
隣の男性が立った。
「こっちに座って」
ふたりの間に入るよう席をずらした。もうひとりの男性も一緒に喋っていたようだったが、紹介はされなかった。
バーの丸椅子に腰を下ろすと目線の先にはＤＭが貼られていた。ゆっくり頭を回してみると店の壁という壁には余すところなくＤＭが貼られている。上を向くと天井にもポスターやＤＭが貼りこまれていた。写真はそんなＤＭやポスターに挟まれるように展示されている。写真は都会の喧騒を撮ったスナップだった。工事現場や車、みな違うところを見ている通行人たち。近い距離から撮ったものや、歩道橋のうえから見下ろすようなカットも混ざ

っている。すべてが夜の写真だった。
「さっそくなんだけどスケジュールを決めたい」
わたしはもらった名刺に目を落とす。『ごろ舎』と書かれている。
「来月」
ごろ舎の主人が言う。
「来月ですか。わたし、写真展とかしたことがなくて……」
「それはこっちがやるから大丈夫。ＤＭも作るから。この写真冊子と同じタイトルがいいと思う」
わたしは「はい」と頷いた。
「ほんとは予定してた作家さんがいたんだけど、合田さんが美術雑誌にレビューを書くのに間に合わせるために代わってもらった。会期は一ヵ月で、作家さんは最低でも二回は在廊して欲しい」
大丈夫ですと頷いた。
「Ａ２サイズでプリントするからデータを名刺のアドレスに送って欲しい」
最後に写真冊子を販売しますかと訊かれた。
世に出してしまえば写真はさらにひとり歩きをすることだろう。しかし、チョウライがカムアウトできたというようにわたしもカムアウトするべきだと思う。
「はい、お願いします」
もう始まってしまったのだ。わたしはリュウ君が写真冊子にすることに協力すると言ってくれた時の顔を思い出した。
展示初日、ごろ舎の階段をのぼってドアを開けると自分の写真が目に飛び込んできた。写真プリントはさらにコントラストが上がっており毒々しさを放っていた。この日までどの写真が使われるのか分かってなかったが、わたしなら選ばないと思うカットが何枚か入っていた。
写真家の聖地と言われるだけあり、バーの客のほとんどが写真に関係する人ばかりだった。その中に外国人もいた。
写真冊子の値段は千円にした。ふたりにひとりは買ってくれたし、サインをして欲しいとも言われた。展示の一ヵ月の半分以上は在廊し、写真冊子は百冊あったのが完売した。
わたしが美しいと感じたものに対して、同じように共感してもらえることがこんなに喜

びを感じるとはと思った。
会期中に時男やミズホ、主宰は観に来てくれたが、リュウ君は来なかった。他の仲間も当然来てくれるだろうと思っていたが、来なかった。
展示の報告もしたくて直後のオフ会に顔を出した。
最初に目があった仲間はさっと目を逸らした。嫌な予感がした。
主宰のところに行き、展示のお礼を言ってるとミズホが来た。
「リュウ君がいなくなった」
わたしの展示が始まったころ、ネットでリュウ君の素性を探しだせというような動きがあったらしい。
「リュウ君が展示を承諾してくれたのは本当ですよね」
リュウ君から直接の承諾を得ていなかったことに不安を覚えた。
「まあ言ったよ。そんなに乗り気じゃなかたけどな……」
だとしたら主宰に押し切られるように承諾したのだろう。わたしはどうしたらいいのだ。仲間を傷つけてしまったことに取り返しがつかない。
「ちょっと話題がさ、うちらが想像していた以上に騒がれたからさ」
ミズホはわたしを責めないように気を使ってくれた。
「けど、名前が売れたのがバンマスで顔がバレたのがわたしたちっていうのも、なんかなあ」
仲間のひとりが言った。
「ごめんなさい……。ほんとにごめんなさい」
わたしは批判した仲間に頭を下げた。
「今日は帰ります」と言って店をでた。

年が明けた。
あの日以来、カメラに触っていなかった。オフ会にも行っていない。時男は気にすることないから来いと言ってくるが、リュウ君はと訊くと、来ていないと言う。リュウ君を苦しめたことにどう償えばいいのか、そればかりを考えていた。
正月休みの最後の日に買い溜めていた食料もなくなったので、一週間ぶりくらいで外にでた。暖かい日だった。スーパーに向かう道すがら、ビルの前を通っていると、作業服をきた男がビルからでてきた。肩に大きな松の枝を背負っている。なぜ松が？　と不思議に思い

作業服の男を目で追っていると、軽トラックの前で止まった。幌付きのトラックで幌にはワールド園芸という文字が書いてある。後ろの幌を開くと一メートルほどの花瓶が載っていた。ビルのエントランスに置く正月用の生け花のようだった。

「あっ」

わたしは思わず声を漏らした。作業服の男がこちらを見ている。すみませんと口元で言って頭を下げた。作業服の男は笑って会釈を返してくれた。

スーパーから帰るとわたしはカメラのバッテリーを充電した。それから時男にＬＩＮＥメッセージを送った。

折り返しはＬＩＮＥメッセージではなく電話がかかってきた。急に家に来てくれと書いたので何かあったのかと心配してかけてくれたらしい。頼みたいことがあるから来て欲しいというと、すぐに向かうと言って電話を切った。

すぐに向かうと言ってもわたしの家は知らないはずだった。するとすぐまた、住所を送ってとメッセージがきた。

一時間後、時男がオートロックの前に立っている姿がモニターに映った。ロックを開錠すると自動ドアを抜けて中に入ってきた。

ドアのチャイムが鳴る。

「どうぞ。急に呼び出してごめん」

わたしは明るく言った。

「いいけど」

時男は電話の声とは違い、探るような、声を潜めて喋った。

「由那の家は初やな」

時男は珍しそうにきょろきょろと部屋を見回した。

「みんな、心配してるぞ。俺もだけど」

リュウ君のことに責任を感じて、わたしもサークルから離れてしまうのではないかと思われていたようだ。

「うん。辞めたくはないよ。でもリュウ君が戻ってこないのではわたしは行けない」

「確かに。リュウ君のマスクタイツ姿がネットで人物特定をしては自慢している一部の輩から注目されたんだよな」

それはＳＮＳでバイトテロやクレーマーが自分のやったことを写真をつけて公開し、炎

上したときによくある「晒し」と同じだった。
これほどまでに顔を出せないのは、公務員や教師のような職業ではないかと憶測が飛んでいた。そこでは、わたしのことも同じように調べられていた。本名を名乗っているし、晒したところで面白くもなかったのか、勤め先を書いているだけだった。
「お願いっていうのは、次の写真の題材のことなんだけど」
時男は目を大きく見開いた。
「次の写真って、まだやるのか？」
言ってることと違うとばかりに、なかば怒気を含んだ言いようだった。
「やるよ。でもセルフポートレイトにする」
「何？」
「自撮りと同じ意味。自分がモデルになって、それを自分が撮る」
考えこむように唇を尖らせているので、
「でも緊縛は自分じゃ無理。時男に手伝ってもらいたいの」
「どこでそれをやるの？」
「ここ」
わたしはひと続きになったキッチンとダイニングを指した。
大きな松の枝をみたときに、台湾で体験した縛りのことを思い出した。自分が花の器になって木花とひとつになることができるのではと思ったのだ。台湾で体験した縛りの写真をあとで見せてもらったときに感じたのはそこで使われていた花が体に比べて小さくて滑稽に見えたことだった。
時男はわたしの話をひととおり聞くと、喜んでやるよと言ってくれた。
次の日、会社は新年のあいさつが済むと午前中で退社できた。
わたしはこれから自宅をスタジオにするための白い布やスタンドライトを一対買うためカメラ店に行った。
ダイニングテーブルに白い布を敷き、ライトを二方向から当てて自撮りしてみる。
正月にはじめたこの撮影は二年余りの時間をかけてようやくまとめることができた。木花は実にいろいろな種類を試した。平日は仕事があるため、休日の朝になると花市場に買いに行く。わたしがいくら小柄とはいえ、人間のからだに見劣りしないほどの木花は大きくて重い。自転車では運びきれず、スクーターを購入した。

カサブランカやカラー、蓮の花を使ったこともあった。この花は初夏にしか出回らず、予約でほとんど売れてしまっている。やっと買えて家に持ち帰っても全然咲かない。夜中にポンって音がするので見に行くと咲いている。こんなに苦労して手に入れた花が散ってしまえば、一年待たないといけなくなる。夜中に時男を呼びつけて写真を撮ったことは忘れられない。

松の木を使ったときはワイヤーで松を体に固定したりもした。花の力に負けないようにわたしの体も鍛える必要があった。ヨガを習い柔軟にいろんなポーズを取れるようにした。

大きく重い木花を自分の秘部に差し込む。骨が軋むくらいつらい思いをして耐えている。アングルや光のことより体力勝負でやってきた感がある。こんなことをやっているわたしは馬鹿なんじゃないかと思うこともあった。わたしは出来上がった写真冊子とプリントを何十枚か持って、芸術大学の合田先生のところを訪ねた。

芸術大学のギャラリーに並ぶ自分の写真を多くの人が観てくれている。これどうなっているのという声がよく聞こえる。

合田先生とのトークイベントが始まったら、どんな質問にも答えようと思う。

まず、わたしがこの写真を撮るまでにあったこと、すべてを話して聞いてもらおう。

プロジェクターにはチョウライやリュウ君の写真が映し出される。それらに解説を加えながら、わたしはすばらしい仲間ですと語る。

人間の体と木花という互いにとって異物であるものが、一見、調和しているようにみえる作品は、どこか少しずつお互いが我慢し合って生きている人間世界に似ていないだろうか。

プロジェクターの投影が終わって、会場に電気がついた。

ちょうど、背の高い痩身の若い男が会場をでていくところだった。その横顔はまぎれもなく台湾の街を一緒に歩いたリュウ君だった。

参考資料

許曉薇　+　邱奕堅　トークイベント　於・gallery176

写真展　花の器